

## 守永報告に関して

まず私自身の立ち位置を説明します。私は社会的選択理論が専門ですが、問題意識を一言で表すと、

… 自律的で理性的な個人が、相互の利益のための社会的協力を編成するにあたり、社会的活動の効率性と成果分配の公正性を保証するための「協力編成の構成原理」を尋ねようとする。換言すれば、経済システムの構造を設計者の観点から検討し、効率のかつ公正な社会的協力編成の設計可能性に関して論理的に思索すること…(鈴木興太郎「経済計画理論」1982 まえがきより抜粋)

となるかと思います。いろいろと論文は書いてきましたがほぼこの問題意識の下で書いたといつてよいです。

政治哲学、特に正義論、などもこの問題意識と重なり、ルソーの社会契約論もこうした観点から読みました。そこで守永報告に関して3点ほどコメントしたいと思います。

### 1. 自然状態は仮想的なのか、それとも歴史的なのか？

ルソーは自然状態はかつて人類の歴史に実際に存在した社会状態として記述しているように感じます。ルソーだけでなく、ロックもホブズもそのような想定で話を進めている感じです。これに対してロールズの前初状態は、人々が自分の頭の中に想定する仮想的な状態です。「もし仮に皆が記憶喪失になって(=無知のヴェールに覆われて)自分が何者かわからなくなったとして、契約するとしたら、どんな契約になるだろう」。これがロールズのアイディアです。ルソーらにはこのような区別を認識しているようには見えません。これは、区別がないからいけないと言っているわけではなく、両者の記述における違いを指摘しているだけです。

### 2. 憐憫・同感に関して。

ルソーにとって重要な概念です。少し議論にありましたが、ロールズでは前初状態にいる主体は憐憫の感情や同感を持っていません。しかしロールズがこういうものを評価しなかったのかということそれは少し違います。

先に指摘しましたが、前初状態にいる主体は現実世界にいる生身の人間ではありません。現実のわれわれが頭の中で想定した架空の主体です。彼らが思考して、正義の原理を前初状態での条件の下で演繹的に導き出すわけです。しかしロールズはそうして導き出された正義の原理がそのままストレートに適用されると考えているわけではありません。導かれた正義原理を現実に応用して、問題がないかどうかを検証するのです。検証の結果、問題ありとなれば、前初状態での条件を変更して、再び前初状態に住む架空の主体に演繹させるのです。この演繹と帰納の二つのプロセスを繰り返して、正義の問題を解決するわけです。解決できた状態をロールズは反照的均衡と呼びます。演繹と帰納の担い手が異なることがユニークな着想といえます。演繹は前初状態に住む架空の主体、帰納は現実世界において正義問題を解決しようとする我々

です。

以上の論点は

渡辺幹雄（1998） ロールズ正義論の行方 春秋社

長久領壱（2004） 規範の受諾：説論としてのゲーム理論 早稲田大学政治経済学雑誌

に詳しいです。

さて憐憫ですが、反照的均衡が行き着き、「原初状態から導かれる正義の原理だけでは不十分。憐憫や同感が必要なのだ」と我々が結論することはあり得ます。実際にロールズは正義論第3部で様々な種類の正義感情（の心理学）を扱っています。この中には憐憫なども含まれます。

因みに、この点に関して

盛山和夫（2006） リベラリズムとは何か：ロールズ正義論の論理 勁草書房

は興味深い考察をしています。反照的均衡はロールズの正義論の中でとても難しい箇所なのですが、その理由を盛山先生は「ロールズが正義論で行っていることそれ自体が反照的均衡となっている。だから反照的均衡を用いて反照的均衡を説明することはできないのだ」としています。正義論は3部構成で有名な原初状態は1部なのですが、ここで終わっていいはずなのに2部3部と続いています。これは確かにそういう理由かなとも思います。

3. 憐憫・同感に関して。続き。

次に経済学の視点から論じます。憐憫・同感の意義は重要ですが、これを使って、「効率的かつ公正な社会的協力編成」（鈴木，前掲書）を行うのは難しいかな、と経済学の観点からは言わざるを得ないです。

M. Sandel (2009) Justice: What's the Right Things to Do? Hayakawa Publishing ハヤカワ書房より訳あり

の冒頭部の話から始めましょう。2004年のハリケーン災害で起きた便乗値上げが社会問題となりました。ガソリンスタンドで一袋2ドルで売られていた氷が10ドル、ホテルの宿代が1泊40ドルが160ドルに…「困っている人々の弱みに付け込み、暴利をむさぼるとは何事か!」と皆怒ったわけです。

しかし経済学者の反応は違いました。「価格の高騰は、それを欲している人々が多いというシグナルである。そのシグナルに反応して多くの物資が集まってくる。結果として被災地の復興は早くなる。なるほど業者の行動は自己利益だけから発し、道徳的には非難されるかもしれないが、その行動が良い結果をもたらすならば、それは非難すべきことなのか。価格の高騰を抑えたら、被災地への十分な物資の早急な調達はかえって遅れることになる。」これは経済学の中心的教義に基づいた見解、きわめて正統的な見解で、要するに「人はインセンティブに反応して行動する」、これを忘れてはいかんということです。

「やってみせ、言ってみせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かじ。」

山本五十六（旧海軍大将，太平洋戦争開戦時の連合艦隊司令長官）

海軍軍人でもこれですからねえ．一般の人はいわんやです．

世界の多くの大学で使われている経済学の入門書 スティグリッツ「経済学」(東洋経済新報社)にも以下のような記述があります．

「今干ばつで，小麦の収穫が減ったとしよう．人々は小麦の消費を減らさないといけない．市場がなければどうなるか．政府は小麦の消費を抑えるように人々に通達しないといけない．時間がかかるし，その通達を人々が知るとも限らない．市場があれば別である．小麦の価格が上がる．人々はなぜ小麦の価格が上がったかを知る必要もない．小麦を今まで通り消費すると出費がかさみ，生計が苦しくなる．こうして小麦の消費を減らすのである．」

利己心に関しては価格というシグナルがあります．そしてそのシグナルを機能させる場として市場があります．以上の例で分かる通り，価格は人々の利己心を刺激し，市場を通して経済問題を解決することができます．

さて対比してみると

	シグナル	場
利己心	価格	市場
憐憫	同感	？

となるかと思えます．憐憫に対して価格のような働きをするシグナルはおそらく同感でしょう．しかし同感を広げる・伝える場，利己心での市場に当たるものがあるかという点，ちょっと見当たりません．同感も弱いですね．例えば映画館で悲惨な境遇の主人公に涙する観客は多いでしょう．しかしその同感が実生活に活かされるかという点はどうでしょうか．劇場を出るともう忘れてしまうのでは（私など子供を連れて，ドラえもんとかポケモンなんかよく見ましたが，劇場出たとたんにストーリーはすべて忘れちゃった．ただ，ディズニー系の古典のアニメは結構頭に残ってますね．やっぱり古典として残るだけのことはあるかと．） まあ，ここでは想像力が欠如するわけです．

しかし可能性が全くないわけではありません．情報化社会はその可能性を開けるのではないかと思います．1年くらい前の話ですが，コロナの影響で収益が落ちた自営業者を親に持つ小学校6年生の話です．親の会話を壁越しに聞いていました．息子を中学受験させることになっているが収益が落ちて生活が苦しい．子供には公立に行ってもらうしかない...って会話．それを聞いた息子はSNSで「僕を学校に行かせてください．うちの商品を買ってください」とSNSで発信．結果として多くの注文が集まったとか．

同感や想像力自体が問題なのではなく，これらをうまく発揮させる場（制度）をいかに編成するかにかかっていると思います．

4．一般意思に関して．

ルソーのキーワードですが，社会契約論を読んでも，何なのかはよくわかりません．まあ，ルソーもああ書くしかなかったのでしょうか．そこでルソー

の時代背景を考えてみます。フランス革命前夜やアメリカ独立など、今日われわれが知る民主主義の理念や価値が人々の間に広まり、社会を動かす力となった時代です。自由・平等・博愛や人権など、誰も抗しえない理念への合意を我々に迫ってくる力、そしてそれを受け入れようとする我々一人一人に備わった善なる魂、そして両者の応答を深く考える、こういうものを一般意思と表現したのではないかと、思われます。まあルソー自身はそういう意図はなかったかもしれませんが、書き物から推測すると結果的にそういう表現になってしまったのではないかとということです。

ロールズの場合、一般意思に該当するものは彼が繰り返し使う表現「社会的協働に向けての冒険的試み（やや引用が怪しいですが）」をなそうとする人々（ロールズとその著作を読もうとする我々）の意思となるでしょう。インセンティブに反応し自己利益の最大化を図る我々の性向を客観的・理性的に眺め、他者への配慮も同時に考えようとする我々は一般意思に突き動かされている（ルソー自身が一般意思に突き動かされて社会契約論を書いた）といえるのでは。これが私の感想です。

そういうわけで「ルソーの一般意思は何か」をあまり深く考えても生産的な議論に結びつかないのではと考えます。一般意思を文字通りの社会構成員全員の民意を超えた合意と解釈すると全体主義の肯定など、ラッセルらが危惧した事態となります。ルソーをそう言う風に読むことは可能だし、そう読まれても仕方がない書きかたになっているとは思いますが、ルソーが感じたことはそれとは別だと思えます。

以上

### 三井報告に関して

専門外なので大したコメントはできませんが、経済学との対応関係を中心に論じたいと思います。

#### 1. 臨床的方法と科学的方法に関して。

確かセミナーでは「経済学において前者は規範的分析、後者は実証的分析に該当するのではないかと私はコメントしました。三井先生の論文にも書かれていることですが、実証的分析は事実命題の真偽を扱います。事実命題とは「…である」という形の言明で表現できます。一方の規範的分析は価値命題の真偽を扱います。価値命題とは「…であるべきである」等のある種の命令・義務を伴う言明の形をとります。自然科学は事実命題を扱い、価値命題は意味を持ちません。「地球上では全ての物体は落下する」は事実命題であり、真ですが、価値命題「地球上では全ての物体は落下するべきである」は命題として意味を持ちません。一方社会科学では事実命題とともに価値命題も考察の対象となりえます。

学説史の系譜をたどれば、経済学において実証的分析と規範的分析を意識的に区別し、その違いの上にならって理論構築を行ったのは、ジョン・スチュアー

ト・ミルが最初です。ミルは『科学としての政治経済学』(political economy as a science)と『術としての政治経済学』(political economy as an art)とを区別し、前者は物理学になぞらえられる真理の集成であり、後者は、社会の選ぶ目的に従って経済を運営するための準則または指針である、と考えました。前者が実証的分析、後者は規範的分析に当たることは言うまでもありません。

但し規範的分析の本格的・体系的展開はピグ の「厚生経済学」からです。ピグ の功績の後、ヒックス・サミュエルソンらの新厚生経済学、アロウの不可能性定理を嚆矢とする社会的選択理論と続き、現代ではメカニズムデザインやマーケットデザインなどが興隆しています。マーケットデザインでの学校選択の問題を例にとりましょう。これはボストン市での公立学校の学校選択の問題ですが、父母の間で選抜方法に関する不満が募ってました。ボストン方式と呼ばれるやり方ですが、これは大学のゼミ選抜で行われているのと同様ルールです。市が目にしたのはタイフンらの論文です。この論文で明らかにしているのは、ボストンルールはパレート最適性と耐戦略性(=嘘をついても得にならない)を共に満たさず、よくないルール(父母たちの不満の原因もここにありました)である。これに対して受け入れ留保方式は両者を満たすことが論文で示されていたのです。受け入れ留保方式に変えて、父母の不満は解消されたのです。

このように経済学では実証的分析と規範的分析は共存補完関係にあります。まあ実証的の方が研究者の数は圧倒的に多いですが、時々両者の違いを混同する人がいて迷惑するぐらいでしょうかね、弊害としていえるのは、前に論文を投稿した時のレフェリーの一人の話をしましょう。エディターがいうには社会的選択理論が専門ではないが、自分がかねてから尊敬する碩学であるとのこと...で、この碩学ですが、「お前たちの論文は現実の事象を説明しているわけではない」と頓珍漢なことを言い出しました。さすがにエディターはまずいと感じたのか、このコメントは却下しましたが、危ういところでしたね。

まあ、この観点からですと、どちらが真の経営学かを争うことは意味がないような...比べようがないし、どちらも重要であることには変わりないと思います。前者は経営の目標を定め、その目標を達成するためにはどのような手段・方策を用いるべきかを考え、後者は経営の実態を観察し、なぜそうなるのかのメカニズムを解明していくわけで、共存関係にあると思います。

## 2. 臨床的方法と科学的方法に関して。続き

以上は扱っている主題に関する違いですが、もう一つの違いは方法論でしょう。臨床的方法では帰納的アプローチ、更にこれはプラグマティズムとも呼ばれています。のみである。しかし科学的方法はモデルを立てて、演繹的に結論を出し、その結論を現実と照らし合わせて真偽の判断をするという。帰納と演繹の二つがちゃんとかみ合っている。この意味で科学的であるという

ことでしょう。確かに自然科学であれば、このアプローチに対して異議はないでしょう。しかし社会科学では帰納と演繹がサイモンらが言うようにうまく行くのが少し疑問です。

最近経済実験というのが流行っています。IT 機器が揃いだしたので、被験者を集めて経済学の理論を実験で確かめるということです。ここで問題なのは、被験者は自らが実験されているということを認識できているのですね。ここが自然科学の実験とは違います。試験管内の化学物質は自分たちが実験されていることを知りません。知らないから、「こういう結果を出したいのだな、じゃあこうしょうか」などを化学物質が行動を変えることはありません。しかしナッシュ均衡が予測通りに実現するかの実験で、被験者の学生たちは「これはナッシュ均衡の実験だな、ここがナッシュ均衡だからこれを選ぼう」と答えたらどうでしょうか。これでナッシュ均衡の成立が実証されたなどとは言えませんよね。

### 3. 経験主義の二つのドグマに関して

これは私などより、哲学ご専門の方が詳しいと思います。ただ私は数理経済学をやっていますので、数学に関しては一般の人よりよく知っているつもりです。これについて語りたいと思います。数学は分析的命題の代表のように考えられますが、完全に経験から独立しているかといえば、それは違うような気がします。点、線、面などの幾何学的概念は明らかに視覚情報による経験から形成されたものです。この世界に光がなく、蝙蝠が進化して文明社会を作ったとしましょう。彼らの世界では幾何学はなく、代わりに音楽をもとに数学が作られるかもしれません。蝙蝠の小学校ではフーリエ解析（調和解析、音響技術などに使われる）が初等数学として教えられています。彼らにとってこれは九九と同じぐらい簡単なのです。代わりにユークリッド幾何学は大学院で教えられている、超難しい分野。感覚と経験が違えば、成立する数学も違ってくるのではと思います。私の考えは数理哲学の分野で身体化理論と呼ばれるものに近いのかもしれません（これに対して数学者の大多数は数学实在論、数学は我々の認識経験に先立って実在するのだ！と考えている様です。）

数学の命題の真偽は経験に訴える必要はない・訴えても真偽の判定にはならない... だから分析的命題なのだ、という標準的見解には私は同意します。これに対して異を唱えるつもりはないですが、数学での概念に関しては経験が大いに関係していると感じます。